様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２２年　５月　１７日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20830003
研究課題名（和文）体育授業における「出来事」調査票の開発とその有効性に関する実証的研究
研究課題名（英文）An empirical study to development and assessment of the efficacy of ‘Class Events’ instrument in during physical education classes in elementary school

研究代表者
厚東　芳樹（KOTO　YOSHIKI）
北海道大学・大学院教育学研究院・助教

研究者番号：80515479

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は，体育授業における「出来事」調査票の開発とその有効性の検討である。そこで本研究では，小学校担任教師を対象に，学習成果（態度得点，運動技能）の高い教師とそうでない教師とに振り分け，体育授業中の「出来事」への気づきとそれにもとづく「推論－対処」がどのように異なるのか比較・検討した。その結果，教師の「出来事」への気づきは，学習成果の相違の影響を強く受けることが認められ，作成した調査票の有効性が確かめられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to development and assessment of the efficacy of ‘Class Events’ instrument. This research was conducted on fifteen teachers in charge of primary 4,5 and 6 grade. The teachers were categorized according to the lesson evaluation given by the pupils (attitude score and movement skill) into those with a high score and those with a low score. A comparison and examination were made quantitatively and qualitatively of how they noticed “class events”. From all of the result, it was found that the awareness of “class events” in lessons is strongly impacted by the professional expertise from view of attitude score and career experience.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,370,000	411,000	1,781,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,470,000	741,000	3,211,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教科教育学
キーワード：小学校体育授業，反省的実践，「出来事」への気づき，態度得点，運動技能

１．研究開始当初の背景

小学校現場の体育科においては，「運動」を知らないまま教えている教師がほとんであると言われている。こうした現状は，子ども一人ひとりの能力に応じて運動を楽しむとする「楽しい体育論」に端を発している。すなわち，上記の体育論は教材である「運動」の特性を遊びがもつ機能的特性に約め，子どもたちの「上手くなりたい」という真正な願いを体育授業の深層に沈殿化させてしまった。これにより，「なぜ上手くできないのか」「どうすれば上手くできるのか」という問いを追求しなくても教師は体育授業を流せるようになった。その結果，教師は体育科に関する実践的知識が低下し，体育授業中の「出来事」を認識しにくくなっている現実がある。こうした現実について，これまで優れた教師が有する知識や技術を明らかにする Teaching Expertise 研究においても，1990 年代以降，「反省的実践」に関する研究が事例的に展開され，教師の授業中の「出来事」への気づきの重要性は認識されてきた。しかし，これまでの量的研究の成果との対応関係まで検討されてきてはいなかった。

２．研究の目的

本研究の目的は，教師の体育授業中の「出来事」の予兆への気づきとそれに対する「推論－対処」を導出するための「出来事」調査票の開発とその有効性を実際の学校現場の体育授業を対象として実証することにある。具体的には，著者らが試作した「出来事」調査票を用いて体育授業を実践してもらい，学習成果（態度得点，運動技能）を高めた教師とそうでない教師とでその調査票の記述内容がどのように異なるのかを比較・検討することで，学習成果を高めた教師の有する実践的知識を導出する。すなわち，以下の 3 点である。

（１）「出来事」調査票を開発する。

（２）「出来事」調査票の記述量と学習成果（態度得点，運動技能）との関係を検討する。

（３）学習成果（態度得点，運動技能）を高めた教師とそうでない教師を対象に，体育授業中の「出来事」の予兆への気づきに対する「推論－対処」がどのように異なるのかを「出来事」調査票の記述内容から比較・検討する。

３．研究の方法

（１）本研究では，「優れた教師」を態度得点を高めた教師と運動技能を高めた教師と設定した。

（２）本研究の対象者は，大阪府下・岡山県下・香川県下・兵庫県下で小学校高学年（5・6 年生）を担任している教師 14 名（研究課題２），北海道下・兵庫県下で小学校高学年（4 年生）を担任している教師 3 名（研究課題３）および各教師の下で授業を受けている子どもたちである。

（３）本研究の対象授業として，「研究課題２」では同一の課題解決的プログラムによる走り幅跳びの授業を一単元実践することを依頼した。すなわち，平成 13 年 5 月上旬から 7 月中旬にかけて，梅野らが作成した「課題形成的学習」における走り幅跳びの指導プログラム（全 11 時間）による授業を展開してもらった。また，「研究課題３」では同一の課題解決的プログラムによるフラッグフットボールの授業を一単元実践することを依頼した。すなわち，平成 21 年 9 月上旬から 12 月中旬にかけて，宗野が作成した「発見的学習」におけるフラッグフットボールの指導プログラム（全 8 時間）による授業を展開してもらった。

（４）授業中の「出来事」への気づきは，著者が試作した「出来事」調査票を用いた。この調査票は，第 1 項目で授業中に生起した「出来事」の内容を，第 2 項目でその「出来事」に対する推論を，第 3 項目でその「出来事」に対する対処のしかたをそれぞれ問うている。これを用いて各被験教師には，「出来事」の予兆と考えられるものすべてを記述するよう依頼した。このとき，教師があらかじめ予測していた「出来事」が生起した場合も記述するよう依頼した。そして，それら授業中の「出来事」の一つひとつに対して，調査票 1 枚に記述してもらった。故に，授業中に生起した「出来事」の頻度数は，記述された調査票の枚数ということになる。収集した「出来事」への気づきに対する「推論－対処」は，先行研究（厚東，2004）において被験教師の記述内容より作成した 6 つの「推論－対処」カテゴリーに分類した。

４．研究成果

（１）教師の授業中の「出来事」への気づきを調査するための「出来事」調査票を試作した（表 1 参照）。すなわち，第 1 項目では「授業中に気づいた出来事の予兆」を（認知），第 2 項目では気づいた「出来事」の予兆に対する推論を（思考），第 3 項目では「出来事」の予兆に対する対処を（判断），それぞれ問うたものである。

（２）上記の調査票を用いて，１授業あたりの教師の「出来事」への気づきの頻度数を比

表１.「出来事」調査票

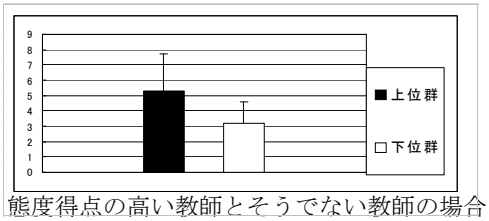
「出来事」記入用紙

年　組　時間目

1. どんな授業中の「出来事の予兆」が起こりましたか。

2. なぜ，そのような「出来事の予兆」が起こったと思いますか。

3. その出来事の予兆に対して，教師が行った手だてはどのようなものでしたか。また手だてを行っていない場合は，どのような手だてを行うべきでしたか。



態度得点の高い教師とそうでない教師の場合

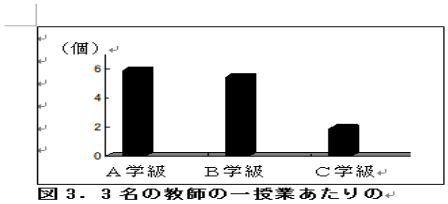


図３．３名の教師の一授業あたりの「出来事への気づき」の平均個数

運動技能の高い教師とそうでない教師の場合

較した結果，優れた教師（態度得点および運動技能を高めた教師）はそうでない教師に比して「出来事」の予兆への気づきが顕著に多かった（平均して，優れた教師は約６個であったのに対してそうでない教師は約３個であった）。これより，学習成果の向上には教師の「出来事」の予兆への気づきが深く関わっているものと考えられた。

今後，どうすれば授業中の「出来事」の予兆に気づけるようになるのか検討することで，優れた教師になるための一つの道程が得られる可能性は高いものと考えられた。具体的には，優れた教師の「出来事」への気づきの内容を精査して，彼らの有していた宣言的知識（A ならば B といった形式化できるものである。例えば，踏み切り手前を狭くすれば助走スピードが落ちないため跳躍距離は伸びる等）と手続き的知識（宣言的知識を実際の実践の場で展開するための知識である。例えば，踏み切り手前を狭くするために横木を置いた走り幅跳びを行う等）を明らかにしていくことで，授業中の「出来事」の予兆に気づけるためにはどうすればいいのか検討していかなければならない。

また，気づきの内容を分類してみると，その大半が技術的なつまずきを防止する内容であった。このことから，優れた教師は「事件」としての「出来事」の発生を予防し，子どもの創発的体験としての「出来事」の発生を促進させている様子が伺われるのである。もっと言えば，優れた教師は授業の場における雰囲気を察知する教師の感性力（これを感性的省察という）に富んでいるように考えられる。

今後，こうした優れた教師の有する感性的省察についても検討していかなければならない。

（３）単元全体における「推論 - 対処」の記述内容量を比較した結果，共通して優れた教師はそうでない教師に比して「合理的推論 - 目的志向的対処」と「文脈的推論 - 目的志向的対処」の２つの推論 - 対処」の記述内容量が有意に多い結果が共通して認められた。上記で認められた２つの「推論 - 対処」の記述内容をみてみると，前者からは教材との間で生じる子どもの技能的なつまずきを予測して，それに対する手だてを十分に準備していたことが，また後者からは子ども一人ひとりの学習過程を看取しようとする姿勢の強いことが，それぞれ考えられた。とりわけ，「対処」の記述内容から，優れた教師は体育・スポーツ諸科学の知見を豊富に有していたことが認められた。

上記の結果は，教師のキャリア発達のための一つの手がかりと成り得るものと考えられた。なぜなら，子どもにとって「つまずき」はつらいものであり，そのまま放置すれば体育が嫌いになるものである。それ故，体育授業の場における技能的なつまずきは，大きな「事件」となる。

上記「合理的推論 - 目的志向的対処」の記述量が有意に多いという結果からは，優れた教師は子どもが運動教材を学び取っていく過程で生じる「つまずき」に向かう動作をよく知っていることがわかる。しかも、対処の記述内容に具体性があり，「つまずき」を起こさせまいとする教師の信念が伝わってくる。これより，優れた教師には過去の実践経験から蓄積された子どもの「つまずき」の類型が予期図式として形成されていることが

わかる。
　さらに，「文脈的推論 - 目的志向的対処」の記述量が有意に多いという結果について，ここでは優れた教師が上手くできない子どもの学習過程，とりわけその子どもの思考・認識の過程をモニターし，仲間の課題解決を助ける「運動の感じ方」の気づきを発掘しようとしている点に共通性が認められた。上手くできない子どもを学級の中の「かけがえのない存在」とする価値観の下で，彼らの自律的な学習への向かわせたいとする想いが伝わってくる。これより、優れた教師は多くの実験経験から様々な子どもの感じ方・考え方を学習過程に即して構造的に把握しているのである。
　今後，優れた教師の有している宣言的知識および手続き的知識を明らかにしていくことで，上記２つの「推論 - 対処」(「合理的推論 - 目的志向的対処」「文脈的推論 - 目的志向的対処」) がどうすれば展開できるようになるのか検討しなければならない。
（４）いずれにしても，上記（1）～(3)の結果，試作した「出来事」調査票は教師の授業中の「出来事」への気づきを調査するためのものとして，妥当であるものと考えられた。
　今後，上記（２）（３）で述べた課題を一つひとつ解決していくことで，どうすれば「出来事の予兆」に気づける教師になれるのかを継続して検討していきたい。
　優れた教師であっても，若いときから「出来事の予兆」に気づくことができていたとは考え難い。むしろ，「事件」としての「出来事」に遭遇し，それを乗り越えてきた経験の学習によって「出来事の予兆」に多く気づけるようになってきたと考えるのが自然であろう。それ故，誰しもが学習成果を高める優れた教師に成り得る可能性がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計２件）

① 厚東芳樹・宗野文俊，小学校体育授業における教師の授業中の「出来事への気づき」に関する研究―学習成果（ゲームパフォーマンス）の相違に着目して―，北海道大学大学院教育学研究科紀要，査読無し，第 110 号，2010 年発行，1-13.
② 厚東芳樹，これからの体育授業研究の課題，体育教育研究，査読無し，2008 年発行，第５号，1-18.

〔学会発表〕（計２件）

① 厚東芳樹・梅野圭史・林修・上原禎弘・山口孝治，職経験年数という物理的条件が教師の反省的思考に及ぼす影響-小学校高学年（5・6 年生）担任教師の場合-，日本体育学会第 60 回記念大会，2009 年 9 月，広島大学.
② 小林徹（代表）・池上哲也・梅野圭史・厚東芳樹・林修・上原禎弘・山口孝治，体育授業における学習ストラテジーに関する因子分析的研究，日本体育学会第 59 回大会，2008 年 9 月，早稲田大学.

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者

厚東　芳樹（KOTO YOSHIKI）
北海道大学・大学院教育学研究院・助教
研究者番号：80515479